

今月のトピックス

我が国の国際航空貨物輸送の動向について

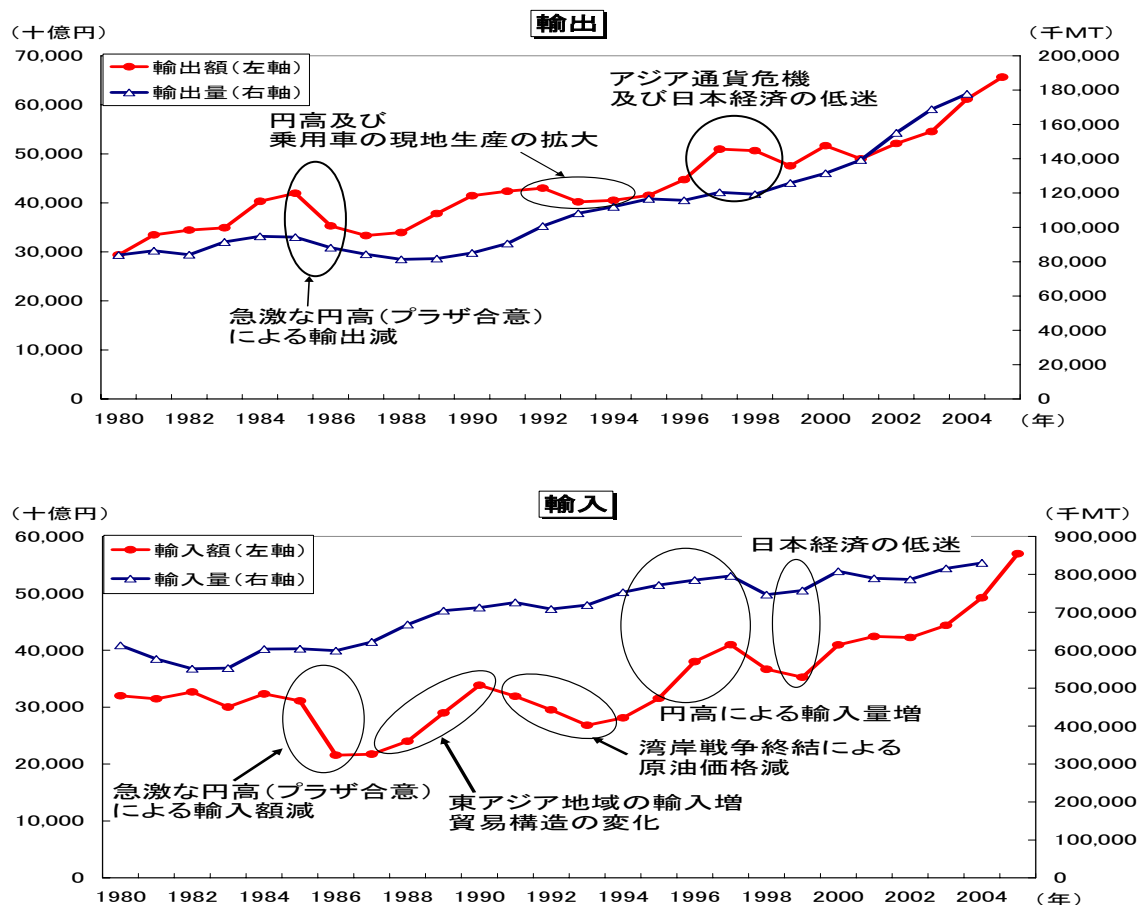
1. はじめに

経済のグローバル化に伴い、我が国と海外の間の物流は増大している。その中でも、軽量で付加価値の高い貨物を中心とした航空による国際貨物輸送は、近年高い伸びを示しており、我が国の産業や国民生活を支える重要な役割を果たしている。

2. 我が国の輸出入の長期的推移

我が国の輸出入は、プラザ合意に伴う急激な円高、アジア通貨危機、我が国経済の低迷等の影響による一時的な減少はあるものの、金額ベース、重量ベース共に概ね増加傾向にある(図1)。

図1 日本の輸出入の推移



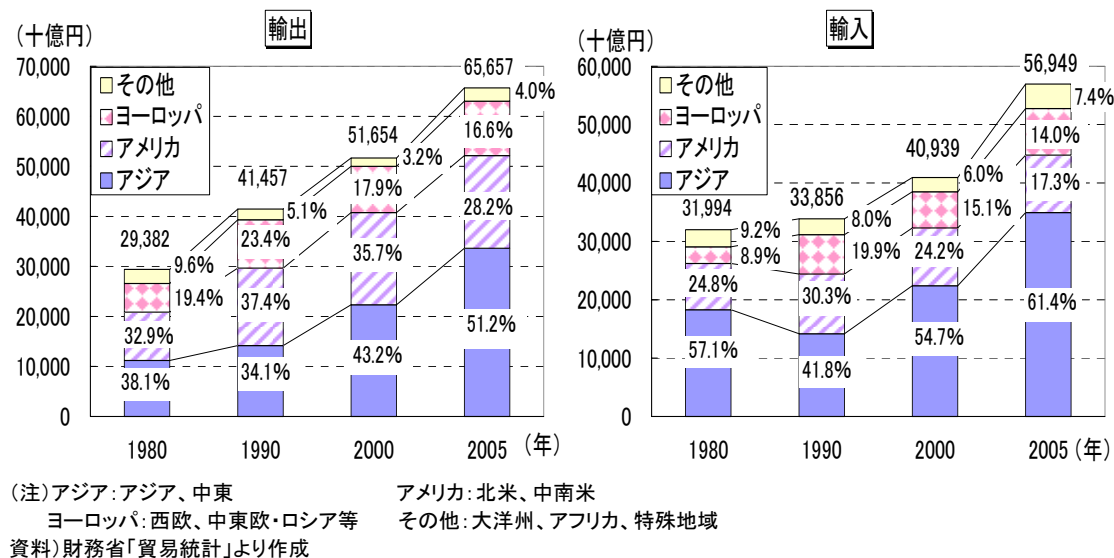
(注1) MT(メトリックトン): 容積トン数(1MT=1トン=1,000 キログラム)

(注2) FAL 条約の発効により、2005 年 11 月以降は船舶の輸出入貨物屯量の統計が存在しないため、2005 年の重量ベースのデータはない(以下の図表においても同様)。

資料) 財務省「貿易統計」及び日本関税協会「外国貿易概況」より作成

また、金額ベースの地域別で見ると(図2)、輸出、輸入共にアジア地域の占めるシェアが年々増加傾向にある。

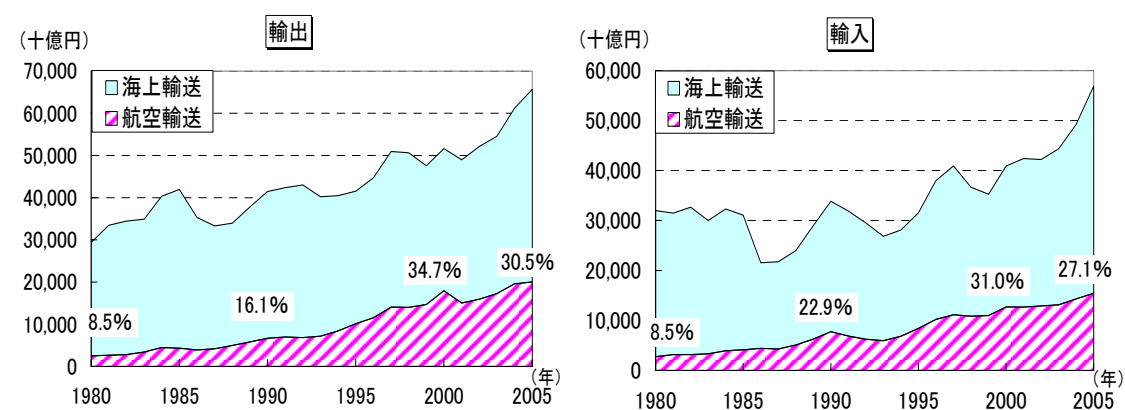
図2 日本の輸出額・輸入額(地域別)の推移



3. 国際航空貨物輸送の中長期的推移と現状

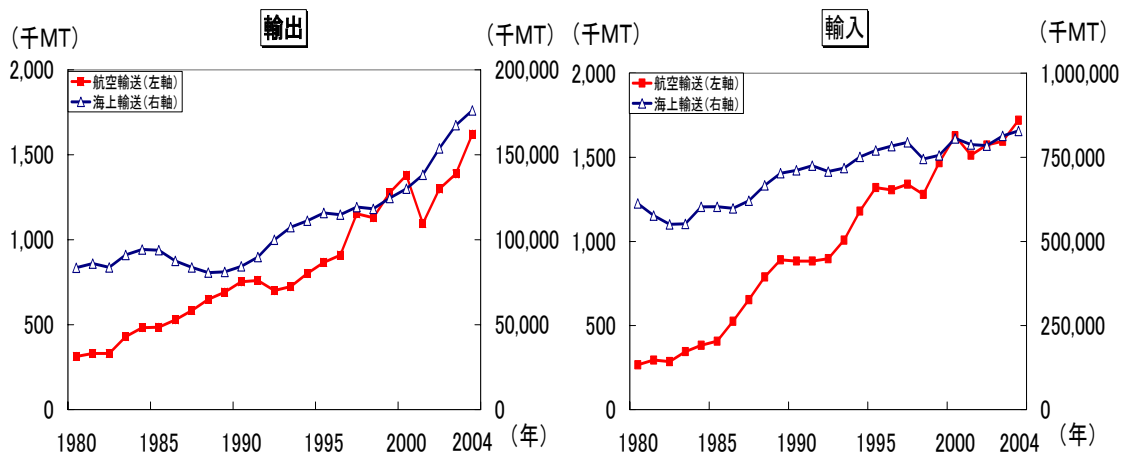
全体の輸出入量が増加する中で、近年航空輸送は大きく取扱量を伸ばしている。金額ベースで見ると(図3)、2005年は1980年と比べて輸出が約8倍(704.0%増)、輸入が約5.7倍(466.6%増)となっており、貿易額全体に占める航空輸送のシェアも、輸出が8.5%から30.5%、輸入が8.5%から27.1%と大きな伸びを見せている。

図3 日本の輸出額・輸入額(輸送機関別)の推移



また、重量ベースで見ると(図4)、輸出入全体に占める航空輸送のシェアは輸出0.9%、輸入0.2%(2004年)と極めて少ないが、1980年と比べて輸出が約2.1倍(110.8%増)、輸入が約6.4倍(544.6%増)と、こちらも大きな伸びを見せている。

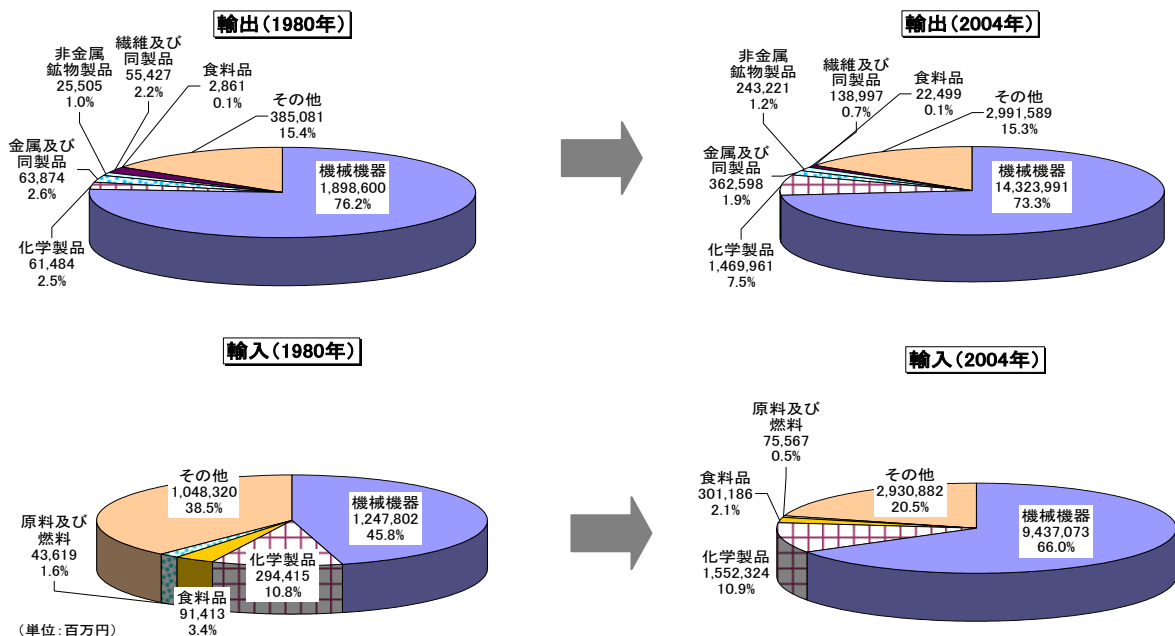
図4 日本の輸出货量・輸入量(輸送機関別)の推移



資料) 日本関税協会「外国貿易概況」より作成

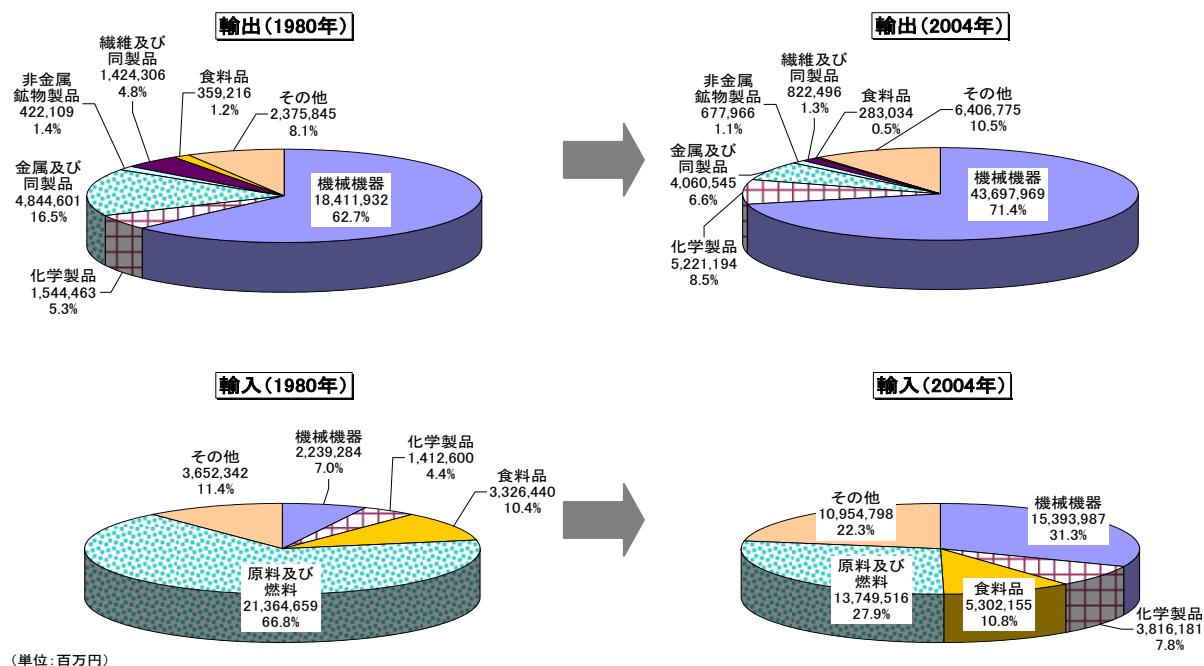
次に、航空輸送による輸出入品目の構成比を 1980 年と比較して見ると(図5)、輸入において機械機器が大きくシェアを伸ばしていることが大きな特徴となっている。また、海上輸送を含めた全体の輸出入の構成比について 1980 年と 2004 年を対比してみると(図6)、輸出においては、機械機器のシェアが 1.1 倍になっており、輸入においては、機械機器のシェアが 4.5 倍、原料及び燃料のシェアが半分以下となっている。

図5 国際航空貨物輸送額・輸入額(主要品目別)



資料) 日本関税協会「外国貿易概況」より作成

図6 日本の輸出額・輸入額(主要品目別)



資料) 日本関税協会「外国貿易概況」より作成

機械機器の輸出入が伸びている要因としては、アジア等から部品を輸入し、我が国で組み立てた製品を輸出する一方、我が国から輸出した部品を用いてアジアで生産された完成品を輸入するといった生産分担関係の発生が挙げられる。例えば国際航空による半導体等電子部品の輸入額は、1990年から2004年の間で5.2倍となっており、同じく音響・映像機器は9.3倍、科学光学機器は4.9倍となっている。また、国際航空による半導体等電子部品の輸出額は、1990年から2004年の間で2.8倍、同じく映像機器は3.8倍、科学光学機器は3.2倍となっている。

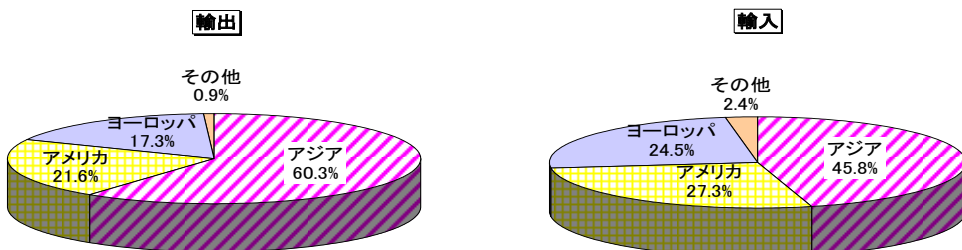
このように、全体の輸出入が増加している中で、機械機器を中心とした軽量で高付加価値な貨物の割合が増えていることが、近年における航空輸送の取扱量の伸び(図3、4)につながっていると考えられる。

さらに、航空輸送による輸出入金額の方面別内訳(図7)を輸出入総額の方面別内訳(図2)と比較すると、輸出についてはアジアへの航空輸送のシェアが総額におけるより高く、輸入についてはアメリカへの航空輸送のシェアが総額におけるより高い。これには、海上輸送を含めた全体の品目別輸出入額(図8)を踏まえて以下の要因が考えられる。

- ① 我が国からの輸出においては、アジアに対しては航空輸送に適した軽量で高付加価値の貨物である電気機器のシェアが高く、アメリカに対しては電気機器も多いが、航空輸送に適さない重量な貨物である自動車等輸送機器のシェアも高い。
- ② 我が国への輸入においては、アメリカからは航空輸送に適した軽量で高付加価値

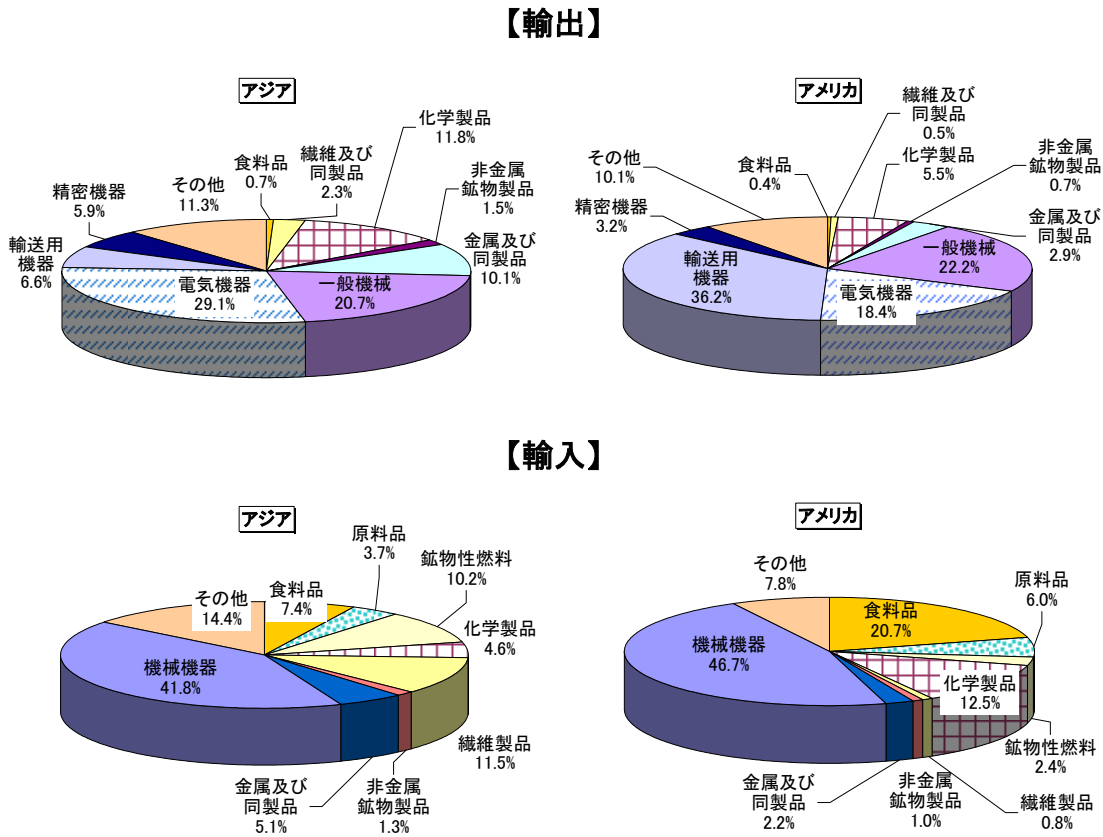
値の貨物を含む機械機器のシェアが高く、アジアからは機械機器も多いが、繊維製品等比較的low額な繊維製品や航空輸送に適さない鉱物性燃料のシェアも高い。

図7 国際航空貨物輸出額・輸入額(地域別)



(注) 2005 年のデータによる
資料) 財務省「貿易統計」より作成

図8 アジア・アメリカとの日本の輸出額・輸入額(主要品目別)



(注) 2004 年のデータによる
資料) JETRO「ジェトロ貿易投資白書 2005年版」より作成

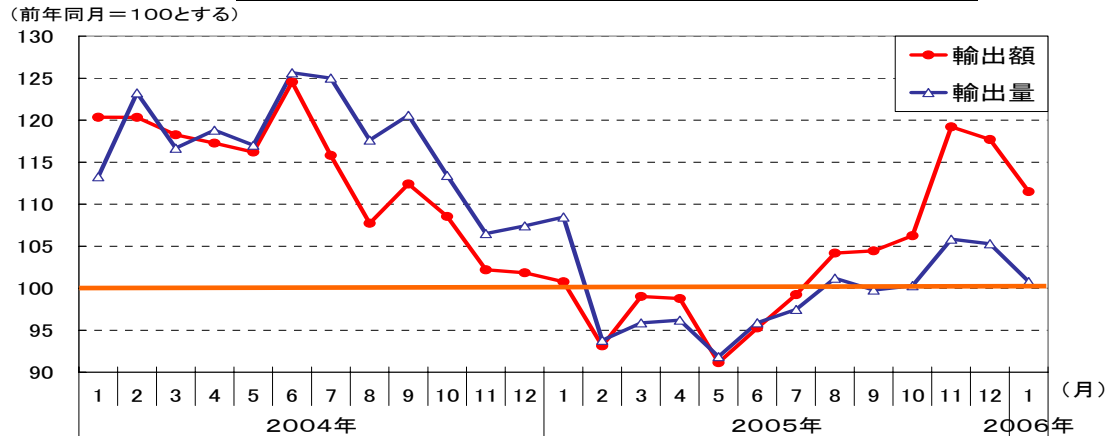
4. 最近の国際航空貨物輸送の分析

3. で見た中長期的推移と現状を踏まえ、最近の国際航空貨物輸送について、月ごとのデータを用いて分析する。

(1)輸出

2005 年の航空による輸出は、2月から7月まで金額ベース、重量ベース共に前年同月比でマイナスとなった後、8月以降は回復した(図9)。

図9 国際航空貨物輸出額及び量の推移(前年同月比)

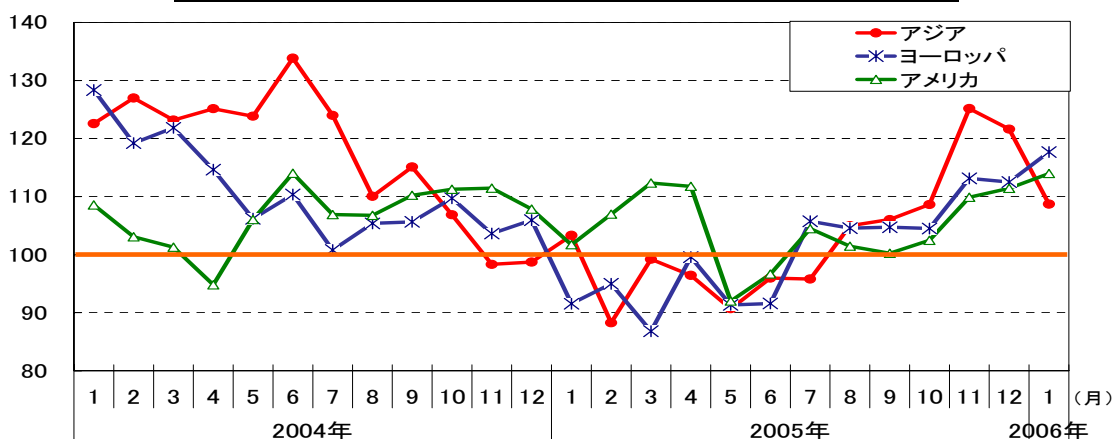


資料)財務省「貿易統計」より作成

地域別で見ると(図 10)、航空による輸出額の約6割(2005 年)を占めるアジア方面への輸出が総額とほぼ同様の動きを見せており、総額の動向に大きな影響を与えていると考えられる。

このような動きの背景には、2004 年後半からのアジア方面を中心としたIT関連分野の生産・在庫調整の影響があったものと見られる。実際にアジア方面への主要品目である機械機器の航空による輸出については、2005 年に入ってから減少し、夏以降に回復しており(図 11)、IT製品^(注)の輸出(海上輸送も含む)も同様の動きを見せている(図 12)。

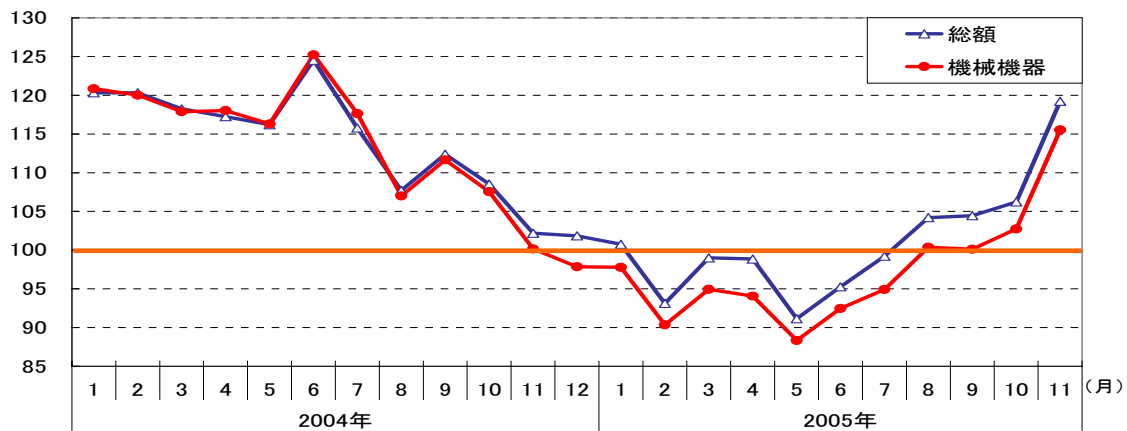
図10 国際航空貨物輸出額(地域別)の推移(前年同月比)



資料)財務省「貿易統計」より作成

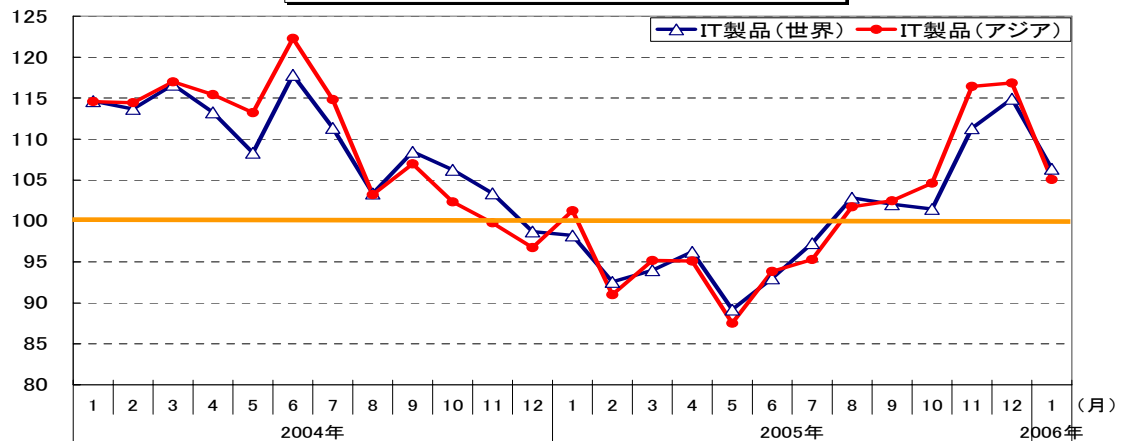
(注) ここでいうIT製品とは、コンピュータ及び周辺機器、事務用機器、通信機器、半導体等電子部品、その他電子部品、映像機器、音響機器、測定器・電子部品である。

図11 国際航空貨物(機械機器)輸出額の推移(前年同月比)



資料) 日本関税協会「外国貿易概況」より作成

図12 IT製品輸出額の推移(前年同月比)

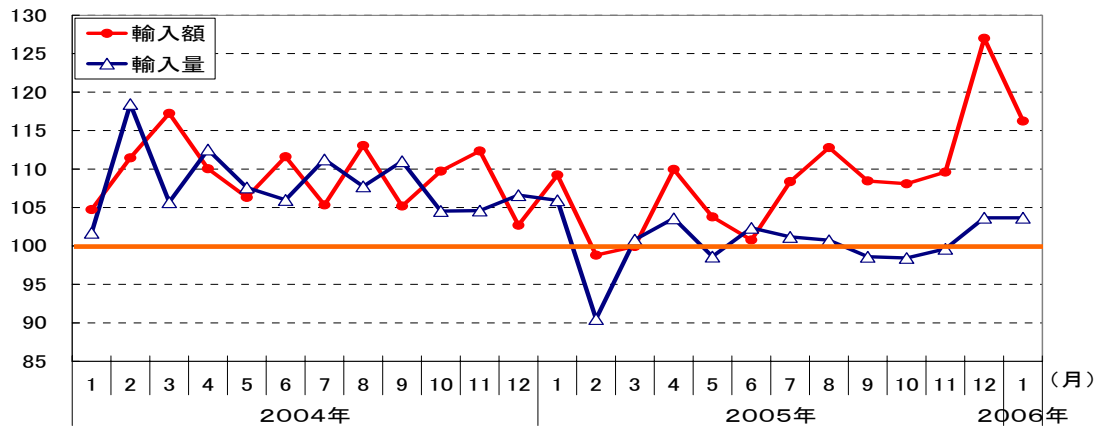


資料) Global Trade Information Service, Inc. "World Trade Atlas"より作成

(2) 輸入

2005 年の航空による輸入は、金額ベースでは2月と3月を除き前年同月比で増加、重量ベースでは7ヶ月で増加、5ヶ月で減少となった。重量ベースに比べて金額ベースが好調であった要因は、原材料の価格が高騰したことや、円安の影響があったものと考えられる(図 13)。

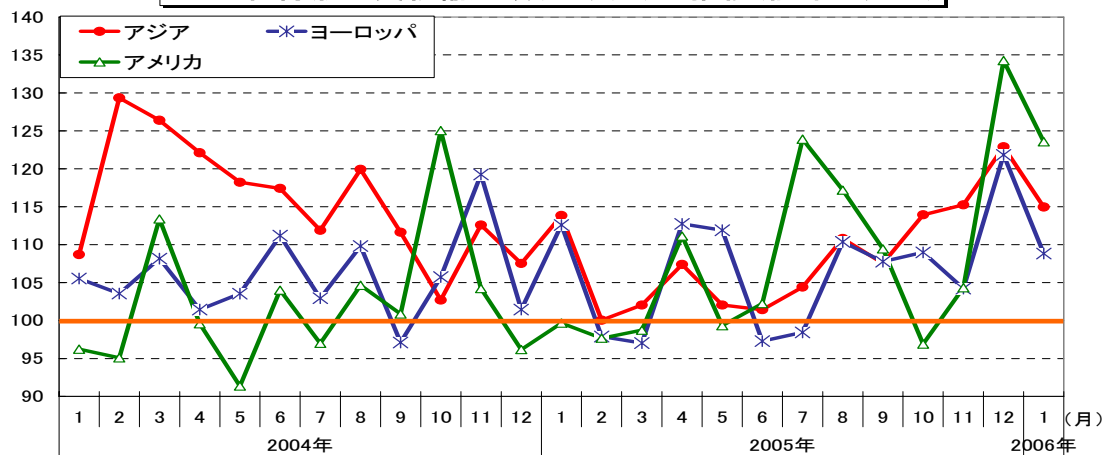
図13 国際航空貨物輸入額及び量の推移(前年同月比)



資料)財務省「貿易統計」より作成

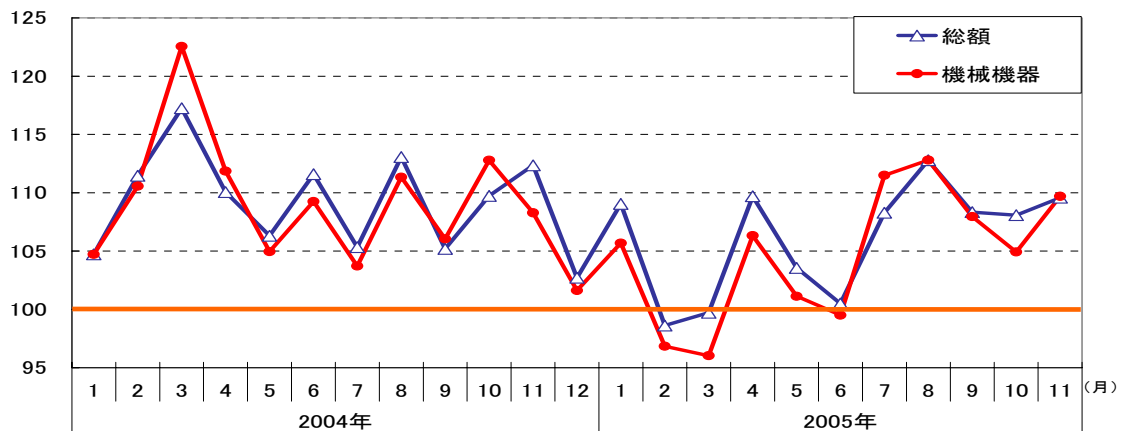
地域別で見ると(図14)、航空による輸入額の約45%(2005年)を占めるアジア方面からの輸入は、すべての月において前年同月比で増加するなど好調に推移した。これは、機械等の部品をアジアから輸入し、日本において組み立てるなど生産分担関係が生じていることに加え、日系企業が東アジアに進出し、生産品を日本に逆輸入するケースが増加していることも要因の一つと考えられる。アジアからの主要品目である機械機器の航空による輸入は、1年を通じて概ね前年同月比で増加傾向であり(図15)、IT製品の輸入(海上輸送も含む)も同様の動きを見せている(図16)。

図14 国際航空貨物輸入額(地域別)の推移(前年同月比)



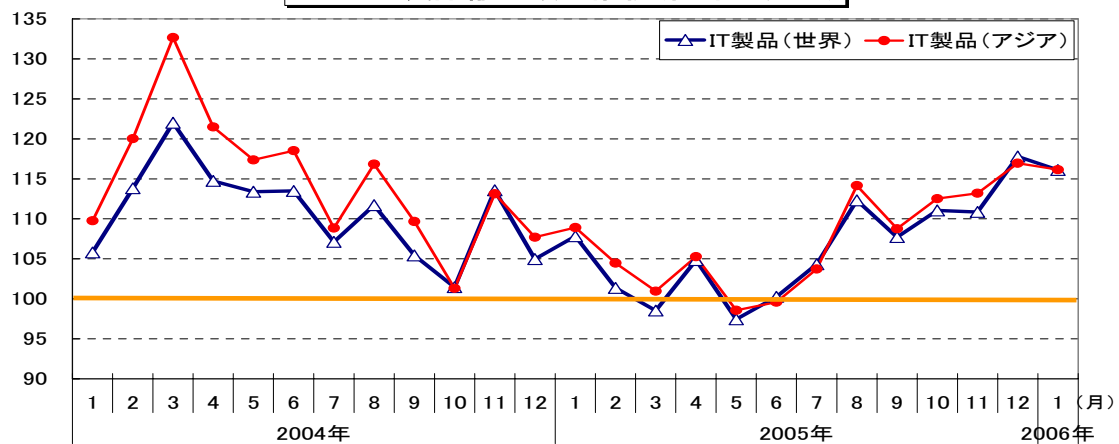
資料)財務省「貿易統計」より作成

図15 国際航空貨物(機械機器)輸入額の推移(前年同月比)



資料) 日本関税協会「外国貿易概況」より作成

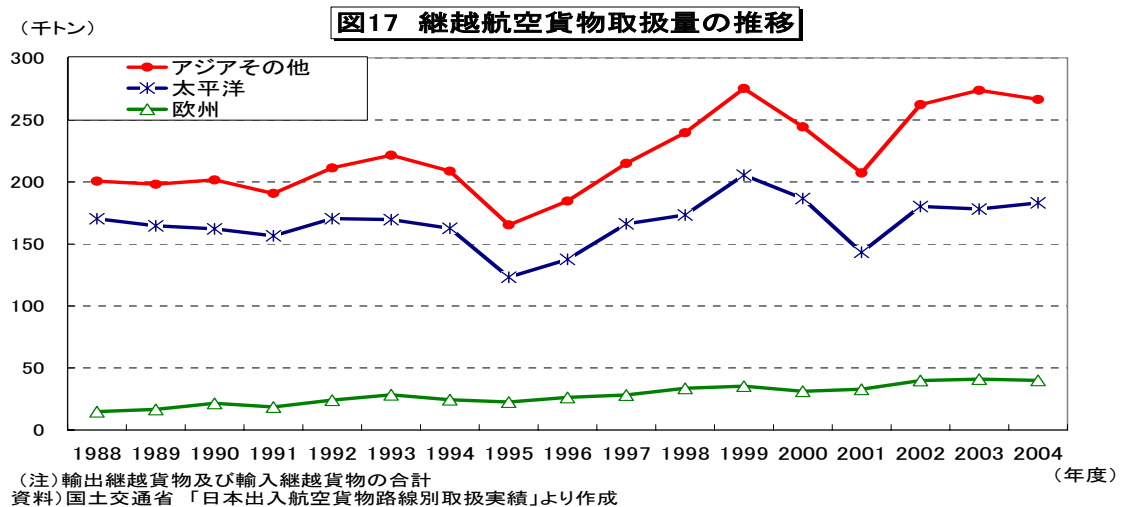
図16 IT製品輸入額の推移(前年同月比)



資料) Global Trade Information Service, Inc. "World Trade Atlas"より作成

5. 継越貨物

最後に、他国から日本を経由して第三国に輸送される貨物である継越貨物を見ると(図17)、1994年から1995年にかけて及び2000年から2001年にかけて太平洋及びアジアその他地域との間の貨物量が減少しているが、その後回復を見せている。これは、我が国の継越貨物の大半を取り扱ってきた成田国際空港の施設能力が限界に達し、アジア各国・地域に整備された国際空港(香港国際空港が1998年7月、上海浦東国際空港が1999年9月、仁川(ソウル)国際空港が2001年3月開港にそれぞれ開港)に貨物がシフトする中で、関西国際空港が1994年9月に開港し、成田国際空港の平行滑走路が2002年4月に供用を開始するなどの増加要因があったことが考えられる。



6. まとめ

我が国の国際航空貨物は、輸出入共にアジアとの間を中心に増加傾向にある。この主な要因としては、輸出入共に、航空輸送に適した高付加価値で軽量の機械機器の取扱量が伸びていることが挙げられる。

輸出については、我が国において生産される製品の取扱量が増加しているとともに、アジアに進出した日系企業への部品輸出の増加が考えられる。一方、輸入においては、我が国での生産のための部品の取扱量が増加するとともに、アジアへ進出した日系企業からの製品の逆輸入も増加していると考えられる。

また、継越貨物の推移を見ると、アジア各国・地域における国際空港の整備に伴い、我が国の空港を経由して輸送していた貨物がシフトする動きも見られる。

このように、我が国とアジアの相互依存関係の深化の中で、国際航空貨物輸送は着実に取扱量を増やしており、今後の動きに注視していく必要がある。